

「水筋のぬけ道」考

―挿絵から読みとれるもの―

笹 山 彩 子

はじめに

『西鶴諸国はなし』は、貞享二年（一六八五）に刊行された。浮世草子の始まり『好色一代男』刊行の三年後のことであり、西鶴の第三作である。全三十五話（全五巻。一卷は七話）からなり、全国二十余の国が舞台となっている。私が今回採り上げる「水筋のぬけ道」は、巻二の第三話にある。

あらずじは次の通りだ。

若狭国小浜に越後屋という、漁に使う網を扱う店があった。奉公人の中に「ひさ」という美人がいた。彼女には庄吉という、末々を契った男がいる。しかし、店の主人の妻はそのことを見咎め、ひさを折檻。「兎角は形、人並なるがゆゑに……」と言って、左の脇顔に焼火箸を押し付け、傷を負わせる。ひさはこ

の火傷を嘆き、海に身投げしてしまった（この時、ひさの遺体は見つからない）。

その頃、大和国秋志野の里で池を掘っていたが、湧いた水と共にひさの遺体が出現する（若狭と奈良の間には、水筋が通っているという伝説あり）。

このことを知った庄吉は出家し、ひさの菩提を弔う。秋志野へ行き、塚で寝入った庄吉の夢の中に、火車が出現する。乗っているのはひさと、越後屋の女房だった。ひさは、女房に焼きかねを当てる、火車は消える。同じ頃、若狭で越後屋の女房が亡くなっていた（注一）。

「水筋のぬけ道」について、現在までにいくつかの先行研究がなされている。それぞれ様々な展開と結論付けがされているのだが、主な注目点として「ひさの遺体出現場面」「ひさの報復場面」の二点が挙げられるかと思う。具体的に言うと、原本巻二の巻目録には「三 水筋

のぬけ道 報 若狭の小浜にありし事」と出ているが、先行研究では、「報」とは越後屋の女房へのひさの復讐のことと解釈し、作品を読み解くにおいてはその部分をポイントにしている。そして、奈良の秋篠(本文では「秋志野」)の地を西鶴が選ぶことで得られる効果は何か、と論を進めていく。そのいくつかを書き記してみる。

最も注目されているのは、この物語の特異な点、遺体出現場面である。若狭と二月堂に地下水脈が通じているという伝説が『南都名所集』や『諸国里人談』に見られること(注2)、秋篠の場所設定については『元亨釈書』に載る秋篠寺開基善珠僧正の伝に拠った可能性があること(注3)、同じく、『秘鈔問答』に載る秋篠寺の阿伽井にかかわる常暁の太元帥明王化現の故事に拠った可能性があること(注4)、が指摘されている。また、報復場面では、他に折檻の場面も含め、嫉妬深い女房が火車にとられて死ぬという点が『因果物語』平仮名本に拠るといふことが指摘されている(注5)。

今までの指摘点を大まかに書き記したが、これらに共通して言えるのは「遺体出現場所」が中心に論じられているということだ。確かに、遠い若狭で身を投げた女の遺体が奈良で発見されるという展開は突飛であり、充分読者を惹きつけ得る箇所だと思う。物語の一つのヤマと言えるかもしれない。だが、本話には他にも注目できる

箇所があるのではなかるうか。本論は、先行研究に、私自身の注目点を加味していくことで、さらに本話の読み解きが進むことを目指す。

私自身の注目点、それは本話の結末「復讐」に到るプロセスである。そしてそこに注目するなかで、具体的には仏教説話・伝説といったものとの関わりについて考察を行った。この考察においては、特に「越後屋の女房によるひさの折檻」の動機と方法を重要視した。

さらに、具体的な考察方法について少し触れたい。本文を考察するにあたり、作中の小道具や挿絵に注目し、読者がそこから連想するであろうものを検討した。近世の文学作品では、しばしばそれらが重要なキーポイントとして扱われ、西鶴作品もそうである。なお、西鶴は自ら挿絵の下絵を描くことがあり、『西鶴諸国はなし』もその一作品である。このことについては、宗政五十緒氏が次のように述べている。

『諸国はなし』の挿絵の中には本文と補完関係にある、本文と挿絵とが積分化されて一篇を成立させている、ということがあるのである。挿絵が本文の単なる説明画ではなかったのである。このことは注意されねばならないことであると、私は考えている。『諸国はなし』の挿絵は西鶴の自筆であると認定されている。本文の記述を補完するという挿絵の画き

方に西鶴の作意があつたことが理解されてくるはずである。(注6)

挿絵を基にして作品を読み解く、その必要性について感じる事ができると思う。また現に、『西鶴諸国はなし』収録中の他の作品でも「絵解き」がなされている(注7)。以上のように、私は本話「水筋のぬけ道」を読んでいきたい。そしてそこから、さらに「水筋のぬけ道」の解釈が進むことを期待する。

第一節 顔に傷

前述の通り、私は折檻場面に注目している。焼火箸により、女の美貌が損なわれる——、その展開は読者に衝撃を与える。

作中の折檻は、雇用者が、被雇用者とその恋人との仲を咎めたことで始まった。だが、「焼火箸」を用いて相手の顔に押し付けるとはいきすぎである。折檻は過剰なものであつた。ではなぜ、必要以上の折檻が行われたのか。焼火箸を押し付ける直前の「菟角は形、人並なるがゆゑに、いたづらをするなれば、目の前に思ひしらせん」という女房の台詞に注目し、考えていきたい。

本文にある通り、ひさは美人である。その容貌が人並みであるから、いたづら——恋愛沙汰を起こすのだ、と

は、文字通りに受け取れば矛盾している。この台詞は、女房の「美しいひさ」への嫉妬を示していると思う。折檻行為には、雇い人への教育という正当な意識があるのかもしれない。だが、その他に、美しい奉公女・ひさへの嫉妬が混じっていたとも解釈できるのではないだろうか。そして最後に女房は「美しさへの嫉妬」が仇となって報復を受けた。そういう読み方が適当であろう、と私は考える。

美しい顔に傷が付けられた。そのことの深刻さ。それは、その後の「女の身にしては、此かなしき大方乱気になつて、…(中略)…世にながらへても、せんなしと思ひ極め」身を投げる、という展開によって計り知ることができよう。また、当時の読者にとって、凶器が身近にある「火箸」であつたことは、作品に親近感を持つ手助けとなり、より非情さや残酷さなどを思い浮かべやすかつたのではないだろうか。

折檻についての解釈を示したところで、本話挿絵を見て欲しい(図)。「左の脇顔に差し付けるに」との文から、ひさは左頬に火傷を負つたと思われる。だが、ひさである女房の左頬には「火傷が無い」のである。「顔をかくなるを」とまでいつている傷が小さいもの、目立たないものであるはずがない。挿絵では、左頬を見せるかのように、体を右下にし、長い髪を耳に掛けてもいる。これ



図 《井原西鶴集》(注1参照)より

はどういうことなのか。私は、文中にはそのような表現が出てこないものの、傷が「消えた」のだ、と解釈した。そして本話に関わる重要事実として注目することとした。はじめに述べたように、私は、『西鶴諸国はなし』において、挿絵を基にしたの読み解きも必要であると考えている。従って「火傷が無い」事実が、本話を読み解く上で注目に値すると思う。そして、それを「傷が消えた」と想像し、考察していくことで、話の展開にとつても意義深いものとなり、何か隠された事実を捉えることができるのではないだろうか。

一つの解釈として、私はある説話との関係を考えている。そのあらずじは「信心深い者が危害を加えられる。

だが、日頃から信仰していた仏像が代わりに傷を受け、無傷だった」というもので、今仮に「身代わり説話」と呼ぶことにする。現在確認できた説話は十。それらは、地域、身代わりになる像、などはバラバラであるが、大体の展開は同じである。この十話は説話・伝説の類から見つけた(注8)。

まず私が注目したのは「頬焼阿弥陀縁起」だった。この話は、鎌倉にある光触寺に絵巻として伝えられている。「順徳天皇の時代、この地に万歳法師という者がいたが、自身の過ちもあり、盗みの嫌疑をかけられ、左頬に焼金を当てられた。だが、本尊の阿弥陀如来を厚く信仰していたので、法師には火傷の跡が残らなかった。『まちのつぼね』は夢中に苦痛を訴える阿弥陀如来を見、また現実には本尊を見るとその頬に焼印がついていることに気づく」というのがあらずじである。「仏菩薩が身代わりとなって人を救う話は、仏教の民衆化に伴って鎌倉以後多く行われている」という(注9)。

残りの話もほぼ似たような展開なので、以下主な特徴を挙げてみる(なお、説話を探す際は「頬焼け」ではなく、「身代わり」をキーワードにしたので、危害を加えられる時、顔に焼けた金属を当てられない話も含まれている。例として、刀で切りつけられたが無傷であった、など)。

一、凶器によって危害を加えられる。
 二、阿弥陀・地藏・観音などの像や御影が身代わりとなり、傷が消える。

三、助けられる人々は信心深かった。

四、事後、それを知った周囲のものが涙を流して感じ入る。そして以後、一層信仰するようになる。

これらのうち、「水筋のぬけ道」と似ている点はどこか。単純に考えれば、一だけである。前述の通り、越後屋の女房は「焼火箸」を使ってひさの顔に火傷を負わせた。私はさらに、その傷と身代わり説話の最大の特徴である二から、あるものに注目した。それは、遺体の身元確認の際に登場する「善光寺如来の御影」である。本文は以下のようになる。

「越後屋の下女に、そのまゝなるは」と、前にまはりて、改めけるに、木綿着物に、鹿子の散らし紋、帯はつねぐ見つけし、横島の黄色にして、胸に守袋、これを明て見るに、善光寺如来の御影、壇特の浄土珠数、書き残せし物を、あらまし誑に、うたがひなく、若狭の事なり。

この善光寺如来の御影を、身代わり説話で言う、身代わりとなる神仏として受け取ることではできないだろうか。これまでに紹介した「煩焼阿弥陀縁起」などの身代わり説話を連想すると残ってしまう問題についても考えて

みよう。前述の原文にも、「御影」が身代わりのように傷を負っていたとする表現はない。そして、三のように、ひさが熱心な信仰者であったとする描写もまたない。周囲のものが感涙を流すということもない。だが一方で、この問題は「身代わり説話」の影響を受けている、いわゆる「さんせう太夫」の話と比べてみると類似点が見つかるのである。

「さんせう太夫」は説教節によって広く伝播したものである。説教節とは「仏教の説教から唱道師が専門化され、声明から出た和讃等を取り入れ、平曲の影響を受けて民衆芸能化したもの。寛永頃、三味線の伴奏を得て洗練され、人形遣いと結んで操人形劇となり「万治、寛文の頃流行した」という(注10)。「さんせう太夫」始め数々の説教節作品は、その元となる話が近世以前に成立し、それに手を加えて説教節として語られていったのだろう。すでに「さんせう太夫」には、仏菩薩の代受苦を扱った例としての指摘もなされている(注11)。代受苦とは、ここで言う「身代わり」に相当する。「さんせう太夫」、その話を以下紹介する。

その昔、岩城正氏という武士がいたが、帝のお咎めで地方へ流されてしまった。そこで残された家族はその領土を安堵してもらうため、京へと旅立つことにする。しかし途中の越後で、人買い・山岡の太

夫に出会い、言葉巧みに売り飛ばされてしまう。この時、母と下女、そして姉・安寿と弟・厨子王の組に分けられたため、以降二組は離ればなれとなる。最終的に姉弟を雇うことになったのは、丹後国由良に住む、さんせう太夫であった。さんせう太夫には五人の子供がいたが、特に三番目の三郎が父と同様悪者で、様々な困難を味わわせる。あまりのつらさに姉弟は脱走を計画するが、三郎に知られてしまい、焼金で顔に十文字の火傷を負わされてしまう。しかし、後になってこの傷は、肌身離さず持っていた地藏菩薩の「白毫どころを見奉れば、きやうだいの焼金を受け取りたまひ、身代わりにお立ちある」という奇跡によって消える。その後安寿は厨子王を逃がし、それを咎められて主人に責め殺される。一方厨子王は、様々な人の助けを受けて無事出世を果たす。後に、さんせう太夫と三郎を残酷な方法で死刑にしている。そして、探し出した母と赦された父、自分を助けてくれた人々を引き連れて領地に帰る(注12)。

「さんせう太夫」は、近世の人々に広く受け入れられ、たらしく、歌舞伎や浄瑠璃、また多くの文芸に取り入れられた。その他、この話にまつわる遺跡なども各地に残っている。

本話との類似点を述べていく前に、あらずじにも書いた「焼金で火傷を負わせる」場面について触れておきたい。これは「身代わり説話」の一部にも言えることだが、相手へ火傷、印をつけるといふ展開が多いことに気が付く。このことの実例を探すと「入れ墨」に思い当たる。刑罰による入れ墨として、顔に入れた記録も残っている(注13)。そういった展開が珍しいもの、とは言いづらいようである。

さて、「さんせう太夫」と「水筋のぬけ道」との類似点(と微妙な相違点)を挙げてみる。それは以下の五点である。

- 一、雇用主が雇い人を折檻する。
- 二、折檻された側の人間が命を落とす。
- 三、折檻した側が復讐される。
- 四、作中、特に信心深いとする行為が認められない。
- 五、身代わりの奇跡に感涙しない。

一から三は、あらずじの通りである。ただし、一の理由は違ってくる。本話においての折檻理由は、前述の通り「美しさ」がキーポイントとなっている。だが、その相違は、本話の特徴として捉えておきたい。

四は、あらずじでは書かなかつたが、身代わりになつた地藏菩薩は姉弟と父を結びつける重要な存在である。しかし肌身離さず持っていたとはいえず、姉弟が格別厚い

信仰心をもって祀ったり、念仏を唱えたりしていたという箇所はない。そして、五は、身代わりの奇跡のすぐ後のことだ。安寿は次のような台詞を言う。「そもやその焼き金をお取りなさるものならば、あの邪見なる太夫、三郎が、又当てうは一定なり。痛うも熱うもないやうに、おもどしあつてたまはれの」。そして、「さてよいみやうせやな。これをついでに落ちさいよ。落ちて世にめでたくは、姉が迎ひに参らいよ」と続け、厨子王を逃がすことを決断する。身代わりの奇跡に歓喜感添するような箇所も出てこない。「さんせう太夫」では、以下、厨子王の逃亡と安寿の苦難を描く。

「さんせう太夫」は身代わり説話のポイントを押さえながらも、独自の展開を見せていると言えるだろう。「さんせう太夫」のような身代わり説話が存在するということは、「さんせう太夫」と類似点を持つ本話もまた身代わり説話を連想してよいことになるのではないか。

自分の美貌へ嫉妬され、過剰な折檻を受けたひさ。彼女の「顔をかしくなるを」という事実が重く、ひさは自殺した。しかし、挿絵に描かれたひさにその傷はない。遺体発見時に傷がないということは、傷が「消えていた」と捉え、このことをもっと注目すべきではなからうか。そして、それはなぜ消えたのかという疑問に繋げていくべきである。

第二節 善光寺如来の御影

西鶴の手によるといわれる挿絵について、もう少し詳しく見ていく。既に述べたように、私は挿絵を大きなヒントにして読み解こうとしている。そして「ひさの火傷が消えている」ことに気がついた。前節ではこのことを、火傷を負った原因——折檻と併せて考察し、身代わり説話と結びつくだらうとした。この考えを検証していくため、さらに本話に用いられた小道具について考えていく。その一つはひさの持つ「善光寺如来の御影」である。

善光寺とは、現在の長野県にある、「牛に引かれて善光寺参り」の寺である。各地に同名の寺があるため、「信濃善光寺」と言ったりもする。本話において「善光寺」という固有名詞を出す意味は何であらうか。

ここで、同じく「善光寺如来の御影」に注目している大川信子氏の論を紹介したい。『因果物語』平仮名本、巻一の八「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」は、善光寺に住んでいる妻が嫉妬に狂い、浮気した夫と相手の下女をとり殺してしまう話である。大川氏は本話と『因果物語』との関係に言及して、「伝助もあるいはひさに思いを掛けていたかもしれないという想像が働く」とした上で、西鶴が『因果物語』のこの話を「着想のヒン

ト」にした可能性を指摘する。また、善光寺との関わりについても「(因果物語)では善光寺に居た女が自分を裏切った男と内通した女を殺す。一方ひさは善光寺如来の御影を持っており、越後屋女房を取り殺す」と、両作品の関係を述べ、さらに『因果物語』巻一の一「執心深き女の蛇に成たる事」なども挙げながら、「ひさが善光寺如来の御影を持っていたとすることは、女の執念の恐ろしさを連想させるための意図的な西鶴の配慮であったかもしれない」とまとめている。そして、やはり越後屋の女房の折檻は「過剰な嫉妬」からくるものであるとする(注14)。

大川氏の指摘とこれまでの私の考察とは相違点がある。それは、大川氏の言う越後屋女房の嫉妬は、男との関係における嫉妬(特に、越後屋伝助がひさに向ける思いを読み取るとすれば、より強い意味としての嫉妬となる)であるが、私のそれは前節で述べたように「美しさへの嫉妬」である。そして、もう一つの「女の執念」であるが、善光寺というキーワードにおいて、別のことを重視し、考察に加えている。それを次に述べる。

善光寺の縁起を簡単に紹介すると、以下のようになる。昔、百済に月蓋長者というものがいた。その娘は如是姫といい、長者はとても可愛がっていた。しかし溺愛のあまり仏道に励むことを忘れ、そのために

娘が重病になるという罰を受ける。ここに到って長者は改心し、一念発起して釈尊に助けを求めた。すると阿弥陀如来が出現し、姫は病から快復する。この時感得した如来が、様々な経路を経て信濃国の人・本多善光に祀られることになる。彼の名を採って、その寺は「善光寺」というようになった(注15)。

本尊が如是姫を救済したことだから、善光寺は幅広く女性を受け入れてきたという。その本尊は「女性救済の仏」として広く信仰を集めていた(注16)。そして、大川氏の意図とは外れるが、氏の論文に挙がる資料からも「善光寺と言えば女性」という当時の意識が伺える。「善光寺」は「女人」あるいは「女人救済」を連想させるキーワードであったのだ。私はこのことを、前述した身代わり説話と関係付けて考えているのである。

善光寺はまた、広範な信仰圏を獲得している寺院であったという。「中世には、『とはずかたり』『曾我物語』『かゝるかや』などの文学作品にも善光寺信仰が色濃く反映し、『善光寺縁起』にもさまざまな靈験譚が付加されて唱導された」という(注17)。大川氏の挙げた『因果物語』の中の善光寺も、その流れを汲むものかもしれない。善光寺の信仰は一派に限らず、超宗派的な性格をもっていた。浄土宗・真宗・時宗など鎌倉新仏教は、既に普及していた善光寺信仰を利用していったという。

「善光寺詣で」という風習は、「伊勢詣で」「大山詣で」などとともに各地の寺院を参拝する旅として知られている。善光寺もまた、他国遠境からの参詣人が多かったという(注18)。そして「西国巡礼」の番外でもあった。

「西国巡礼」とは「西国三十三カ所」とも呼ばれ、西国三十三所の観音霊場を順拝することである。平安末期、観音信仰のもと定められたという。「巡礼は、哀調を帯びた巡礼歌(御詠歌)を詠唱しながら各所を遍歴し、三十三所一拝ごとに、巡礼札を納めるか、あるいは、笈摺に各寺の印を押す習慣であった。そして、巡礼者は『迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北』の偈を記した笠をかぶり、阿弥陀三尊の種子を中央に、左右に巡礼札の箱を提げるといふ」巡礼姿であったといふ(注19)。再び図に掲げた挿絵を見てほしい。ひさの前にある二つのもの。これらは巡礼者の、偈が書かれた「笠」であり、長いことが特徴の「杖」ではないだろうか。私は、読者が挿絵を見た時点で「巡礼」、それも「善光寺如来」という記述を受けて西国巡礼と繋がりもある「善光寺」を特に意識すると考える。すなわち、読者は巡礼を連想させる「笠と杖」から「善光寺」の存在をより意味あるものとして感じる。「善光寺」といえば「女人救済」。本話を振り返ったときには、特に「ひさ」の受難に思い至り、その救済を予想する、私はそう思う。しか

し、ひさが救済されたと考えると、ここに再び大きな疑問が残る。既に死体として描かれているひさを「救済」できるのか。できるとすれば、それはどういうことなのか。それは、次節で述べることにする。

第三節 撫子紋

本文では、発見時のひさの着物は「鹿子のちらし紋」となっている。だが、挿絵には全く違う柄が描かれている。このことは、間違っているよりも、かえって読者の興味を惹く効果があるように思う。つまり意味を持った表現だ、と私は考えている。その意味を、以下考察することとする。

挿絵に描かれた着物の柄、それは「撫子」ではないだろうか。『日本家紋総覧』に乗る「秋月撫子」は特に良く似ている(注20)。撫子は別名「常夏」ともいう。春から秋にかけて咲き続けることから「変わらない」という意味で付けられた名である。私はその「変わらない」という意味をキーワードとし、この挿絵を、ある事実が隠されたものとして読むべきだ、と思う。

では、挿絵から見つけられる「変わらない」ものとは何なのか。第一節で述べたことだが、挿絵では、ひさの顔から傷が無くなっている。ここでも、私はその事実

注目した。つまり読者は、ひさが折檻前と「変わらず美しい顔」であったことを、挿絵から発見できるのではないだろうか。この挿絵においては「傷が無い」ことと「撫子」柄が描かれたこと、それらを併せて考えることもまた、可能であると思う。

「変わらない」ことを連想させるであろうことが、もう一つある。舞台・若狭にある伝説が本話と密接に関わっていることは、先行研究にもあるとおりである。注目したのは、伝説の一つ「八百比丘尼」である(注21)。「八百比丘尼」は「白比丘尼」ともいい、『西鶴諸国はなし』の序文にも「わかさの国に式百余歳のしろびくにのすめり」と採り上げられている。様々な話が伝わっているが、大まかに説明すると「昔、若狭に住む人が、珍しい肉を手に入れる。それは人魚の肉であった。その子供に、年頃で器量よしの娘がいて、父親が持ち帰った人魚の肉を食べる。すると彼女はいつまでも年をとらず、美しいままであった。やがて出家し、諸国を行脚した」というものである。序文にもあるとおり「しろびくに」と若狭とは繋がっている。そして「しろびくに」はまた不老不死であった。何年も「変わらず」生き続けている。ここでまた「変わらない」ことを意識できると思う。

「撫子」と「八百比丘尼」が示すこと「変わらず」を意識して挿絵を見てみると、ひさの顔から「傷が消えた」

ことだけでなく「死後も、彼女が変わらず美しかった」ことにも気がつく。

はじめに私は「身代り説話」と結びつく、と述べた。それは、前節で疑問が残った「ひさへの救済」が、やはり行なわれており、それは「顔の傷が消えた」ことであった、と考えていることによる。その救済は「美しさ」への嫉妬、という理不尽な理由で美貌を損なわれ、そのことへの絶望から自殺した女にとつて、多大なものである。「身代り説話」の影響に気がついた読者は、そう感じるのではないだろうか。典型的な「身代り説話」なら、ここでハッピーエンドである。しかし「さんせう太夫」のように、救済後も更に話は展開していく。本話の場合は、ひさの「美貌を奪われた」ことへの恨みがメインになつていくと思う。

火傷は消えた。だが、ひさの「怨み」は、消えなかったのである。ひさは「報復」した。その場面において「是を押して、焼かねあつるは、我なれし、ひさが姿の替る事なし」という文が登場する。私は、この文を「顔も含めひさが変わらず美しかった」ことを示していると読む。そしてそう考えると、本話冒頭部分で「やさしく」と形容された姿で、火車に乗り、焼きかねを当てつけて報復を果たすというひさの姿が浮かび上がってくる。外見・容姿の「美」と、恨みや怒りといった、内面に渦巻

く「闇」、対照的なこれら二つが揃って描かれることで、結末である「報復」がより印象付けられることはもちろん、さらに「顔に傷」ということから一連の出来事が起こったことに思い至れば、ひさ自身にとつても、また彼女に嫉妬して折檻を行なった、越後屋の女房にとつても、容貌の「美」への執着が、一方ではなかったことが感じ取れるのである。

まとめ

本話「水筋のぬけ道」においては、身投げしたひさの「遺体移動」という不思議な展開に注目し、それを副題やその後の展開である報復に結びつける読み方が多くなされてきた。しかしながら「挿絵も重要な作品解釈の材料となる」という考えのもと、本話を読んでみると、まず「ひさの傷が無い」という事実が気が付くだろう。そしてそのことは、作中の折檻を重視し「焼火箸」や「善光寺如来」といった小道具を繋げて考えることで「身代り説話」を連想させる、そう私は指摘した。

さらに私は、本論をまとめるにあたり、本話一連の出来事は、ひさと越後屋の女房、二人の女による「美貌」への執念から起こったものである、という結論に達した。そのことは、その他の「身代り説話」とは違った、本話

の特徴としても挙げられると思う。この結論の背後には、恋人庄吉の存在がある。ひさが折檻を受けた原因には、彼が関わる。しかしながら、その折檻やそこから生じた報復場面では、積極的役割をしていない。その理由として、私は以下のように考える。

庄吉から感じられること、それはやはり、ひさの「美貌」である。彼がどのくらいひさに魅せられていたのか、それはひさの死後、出家したという具体的表現からも、うかがえると思う。そしてそういった彼の姿により、読者の目が、ひさのもつ「美しさ」や、そこから発する魅力へと、さらに向くことになるのではないだろうか。ところが、その美しい顔に酷い傷がつく……。こうした展開は、読者の意識が引き込まれていく、一つの要因ともなるのではないだろうか。つまりメインが、一貫してひさの「美しさ」である以上、庄吉はあくまで引き立て役であり、本話の主な筋からは、外れた存在であった。それゆえに、彼は目立った活躍をせず、読者もそのことに違和感を感じなかったのではないだろうか。

「美しさ」への思い。それゆえに、女房は過剰な折檻を行った。そしてそのことにより、理不尽に「美貌」を奪われたひさの怨念。それは、元の美貌を取り戻せたとしなくても忘れることのできない、凄まじいものであった。本文中に直接的表現を見ないものの、私はこのことも本話

を読み解くポイントであるとし、改めてここに提示する。
『西鶴諸国はなし』を扱った論文は全体的に見て、少ないのではないかと思う。「水筋のぬけ道」については比較的多い方であったが、今後、作品全体の研究がさらに進み、それぞれの隠された意味や読みが見つけれられていくことを、稚拙ながら一話を論じた一人として願う。近世の作品を読むとき、登場する小道具などが当時、どのように捉えられていたのが、物語を読み解く重要な鍵となる。そのことを、自分なりに課題や疑問点を見つけ、調べ、論とすることで再認識した。

- (注1) 本文の考察は、江本裕編『西鶴諸国はなし(翻刻)』(平成一三、おうふう社)を中心に、宗政五十緒『井原西鶴集②』(新編日本古典文学全集、平成八、小学館)、『好色二代男西鶴諸国はなし 本朝二十不孝』(新古典文学大系、平成三、岩波書店)、『西鶴諸国はなし・懐視』(決定版 対訳西鶴全集五、昭和五〇、明治書院)を参照しながら行った。本文の引用は前掲『井原西鶴集②』より行った。
- (注2) 近藤忠義『西鶴』(昭和一四、日本評論社)。
- (注3) 長谷川強『浮世草子新考』(平成三、汲古書院)。
- (注4) 井上敏幸『西鶴諸国はなし』三題『(江戸時代文学誌) 平成二・一一)』。
- (注5) 大川信子『西鶴諸国はなし』試論——「水筋のぬけ道」をめぐって——『(常葉国文) 平成六・九)』。
- (注6) 『井原西鶴集②』(新編日本古典文学全集、平成八、小学館)解説。

- (注7) 井上敏幸『忍び扇の長哥の方法』(『国語と国文学』昭和四八・一二)。
- (注8) 巖谷小波『説話大観 大語園 第⑧』(昭和五三、名著普及会)、『日本伝奇伝説大事典』(平成六、角川書店)。
- (注9) 『類焼阿弥陀縁起 不動利益縁起』(続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇四、平成七、中央公論社)、『日本伝奇伝説大事典』(平成六、角川書店)。
- (注10) 高木市之助『日本文学の歴史』(平成八、武威野書院)。
- (注11) 『日本伝奇伝説大事典』(平成六、角川書店)。
- (注12) 『説経集』(新潮日本古典集成、昭和五二、新潮社)より。以下、「さんせう大夫」の本文の引用はこれによった。
- (注13) 林美一『時代風俗考証事典』(平成五、河出書房新社)。
- (注14) 大川信子『西鶴諸国はなし』試論——「水筋のぬけ道」をめぐって——『(常葉国文) 平成六・九)』。また、有働裕氏は、折檻を「奉公人の管理・教育」と取りながら、「ひとという若く美しい女の存在そのものへの嫉妬」を読み取っている(『西鶴 はなしの想像力』平成一〇、翰林書房)。
- (注15) 中野猛『略縁起集成 第六巻』(平成一三、勉誠出版)、『日本名利大事典』(平成四、雄山閣出版)、『日本仏教史辞典』(平成一三、吉川弘文館)。
- (注16) 注15に同。
- (注17) 『日本説話伝説大事典』(平成一一、勉誠出版)。
- (注18) 神崎宣武『江戸の旅文化』(岩波新書、平成一六、岩波書店) 佐藤米司『葬送儀礼の民俗』(民俗民芸双書、昭和四六、岩崎美術社)。
- (注19) 武田明『巡礼の民俗』(民俗民芸双書、昭和四四、岩崎美術社)。
- (注20) 能坂利雄『日本家紋総覧』(平成三年、新人物往来社)。また、物集高見『廣文庫』(大正六、廣文庫刊行会)。を参照

した。

(注21) 『日本奇談逸話伝説大事典』(平成六、勉誠社)。『日本昔話事典』(昭和五二、弘文堂)。和歌森太郎『若狭の民俗』(昭和四九、吉川弘文館)。

《その他の参考文献》

- ・井上敏幸『西鶴本二代』——『諸国はなし』二の三と『懐硯』四の五——『近世文学俯瞰』平成九、汲古書院。
- ・『西鶴を学ぶ人のために』(平成五、世界思想社)。
- ・杉本好信『西鶴と説話』(酒吞童子・道真をめぐる手法——『国語国文論集』平成七、一)。
- ・篠原進『西鶴諸国はなし』(平成一・一、『日本文学』)。
- ・高田衛『仏教説話の近世』——『西院河原口号伝』をめぐる——『国文学』解釈と教材の研究』平成一一・七)。
- ・井口洋『鯉のちらし紋』——『西鶴諸国はなし』試論——『西鶴試論』平成三、和泉書院)
- ・『西鶴事典』(平成八、おうふう社)。
- ・駒敏郎ほか『若狭・越前地方の伝説』(日本の伝説、昭和五五、角川書店)。
- ・森田雅也『西鶴諸国はなし』試論(上)——「人はばけもの」論——『関西学院大学日本文学研究』平成一一・一二)。
- ・西島夜也『西鶴諸国はなし』論序説——諸国はなしと奇談という枠組——『武庫川国文』昭和六二・一一)。
- ・高野辰之『江戸文学史』(昭和一〇、東京堂)。
- ・『新編日本史図表』(平成一一、第一学習社)。
- ・宮本声太郎『めし・みそ・はし・わん』(昭和四八、岩崎美術社)。

(平成十七年三月二三日)

(日本文学科一期生)